

「教員相談論」における教員養成への貢献

教育学部・相模健人

1. 授業の基本情報

本報告では従来、教育学部において開講されていた「教育相談論」（通年、2単位）について、新型コロナウイルスの影響を受けて遠隔授業を行った授業について対象とする。

授業では受講学生には事前アンケートとして「この授業がほんの少しみなさんに興味深い授業になっていたら、みなさんはどんな態度で授業を聞いているのでしょうか？みなさんは授業内でどんなことをしているのでしょうか？」の問を行い、その結果をKJ法(川喜田, 2017)でまとめ、学生に提示した。受講生数 184 名に対して、155 名の回答を得ている。

この授業態度目標について授業回(第 2-14 回授業)ごとに受講学生に受講態度について、10 段階で評定してもらった。その受講態度評価について、全授業回答者 73 名を対象に低群(35 名)、高群(38 名)に分け、前期(第 2-6 回授業)、中期(第 7-10 回授業)、後期(第 11-14 回授業)の時期の群×時期の 2 要因分散分析を行うことで、授業態度の評価による時期の違いがあるかを検討した。統計分析については Excel HAD を用いた。

2. 授業評価の内容

まず KJ 法の結果から示す。島は大きく「授業前後」「授業の要望」「授業内」に別れた。

この内、「授業前後」では「授業準備」「予習復習」「課題を提出」「個人的に調べる」「見直す」の島に別れ、授業前後における予習復習や個人的な調べ物に関する意見が見られた。「授業の要望」では教員への授業の要望がある。

「授業内」は更に「基本態度」「聞く態度」「メモ、ノート」「疑問を持ち質問」といった島と更に大きく「学ぶ」「グループワーク」「考えてまとめる」の島に別れた。

「学ぶ」では「基本の対応を学ぶ」「自分の知識を増やす」「具体的な解決方法を模索」といった教育相談的手法を学ぶ島が見られ

た。

「グループワーク」の島では「積極的に発言」「他者の意見も取り入れる」「討論をスムーズに」「活発に討論」といった授業内で行われるグループワークに関する目標が見られた。

「考えてまとめる」の島では「教師になったつもりで真剣に考える」「様々な視点から考える」「自分の意見を持つ」「自分なりにまとめる」といった考える姿勢に関する目標が見られた。

次に受講態度の分散分析結果について示す。全授業回答者 73 名の授業態度の平均は前期 7.91(SD 1.41)、中期 7.81(SD 1.30)、後期 8.05(SD 1.36)であり、全体で 7.91(SD 1.35)であった。低群においては前期 7.23(SD 1.32)、中期 6.99(SD 0.94)、後期 7.26(SD 1.16)であり、全体で 7.14(SD 1.01)であった。高群においては前期 8.54(SD 1.38)、中期 8.53(SD 1.13)、後期 8.76(SD 1.18)であり、全体で 8.60(SD 1.14)であった。

上記のように群×時期の 2 要因分散分析を行ったところ、主要因の効果が見られ、群で F 値 383.56($p < 0.01$)、時期で F 値 3.76($p < 0.05$)であった。交互作用の結果は見られなかった。

下位検定を行ったところ、群間で低群 < 高群の結果が見られた(t 値 -19.59 $p < 0.01$)。時期では前期-中期(t 値 0.59 n.s)、前期-後期(t 値 -1.95 n.s)では有意差は見られず、中期-後期(t 値 -2.66 $p < 0.05$)の結果が見られ、中期 < 後期であった。

3. まとめ

時期の主効果の結果から後期において学生が受講態度を中期より改善している結果が見られ、目標の提示のみでも受講態度の改善が考えられた。しかし、前期-後期の差は見られず、全体的な改善には至っていないことから更に受講態度改善の介入が必要と考える。